

シルバー人材センターと民間企業による相乗効果に期待 新たなビジネスモデルで 名古屋市自転車駐車場管理に挑む

森井 博

『自転車・バイク・自動車駐車場 パーキングプレス』誌 発行人

若杉 賢二

公益社団法人 名古屋市シルバー人材センター 理事長

寄贈者
太平洋美術会
船橋 淑
平成9年

彼女の存在

【プロフィール】

若杉 賢二(わかすぎ けんじ)
1951年名古屋市生まれ。1974年静岡大学人文学部法経学科卒業、同年名古屋市役所に採用。健康福祉局生活福祉部長、同局理事、同局副局長。人事委員会事務局長を最後に退職。2012年6月～2017年6月まで公益社団法人名古屋市シルバー人材センター理事長

少子高齢化社会への移行が着実に進む日本。昨年9月の国の調査時点では、日本人の4分の1超が65歳以上だった。2024年には、全人口の3割程度まで65歳以上の割合が増えることが予想されている。今後、我が国の生産性や活力を維持していくために、高齢者の労働力が一層重要視されるのは確かだろう。

そうした時代にあって存在感を高めているのがシルバー人材センターだ。平成27年度時点で団体数は全国に約1300。各地域で高齢者がさまざまな分野で経験を活かした仕事に就き、社会に大きく貢献している。もちろん自転車駐車場の業界でも欠かすことのできない戦力であり、主に自転車駐車場の管理員として活躍していただいている。

今回、対談ゲストとしてご登場いただいたのは、公益社団法人名古屋市シルバー人材センターの理事長・若杉賢二氏。貴重な高齢者の労働力を供給いただいているシルバー人材センターのなかでも、全国屈指の規模をもつ団体の長だ。このたび、縁あって弊社サイカパーキング株式会社とJVを組み、名古屋市内で自転車駐車場の管理業務において共働することになった。公益社団法人の人材力と民間企業のノウハウはどんな相乗効果を生むのだろうか。新たなビジネスモデルの可能性をテーマにお話をうかがった。
(対談収録：2017年6月2日)

「福祉」をベースにして発展した 全国屈指の団体

森井 冒頭にあたり、まずは貴センターの概要を教えてくださいませんか。
若杉 いわゆる「福祉元年」とされた1973年に、我が国において福祉に対する考え方が大きく変わり、本格的に地域福祉に取り組むようになりました。その頃から「自助」「共助」という概念が登場し、名古屋でも地域でお年寄りや子ども、

も、障がいのある方も安心して暮らせる街づくりをしましようという機運が生まれたのです。そこで「福祉風土まちづくり事業」が立ち上がりました。ひとり暮らしの高齢者の方への給食サービスなどが生まれ、地域でのボランティア活動が活発に行われるようになりました。そのような社会の動きのなかで仕事を通じて高齢者が生きがいが高めたり、地域に貢献したり、自らも健康になったり、といった分野があっても良いのではないかと、との声が出てきたのです。

森井 福祉元年から今日まで半世紀近くが経過し、福祉のメニューもずいぶん多様化してきたわけですね。

若杉 当時、名古屋市ではシルバー人材センターの設立にあたり、その業務を名古屋市社会福祉協議会が担うこととなりました。1981年に名古屋市南部に「高齢者能力活用センター」が多くの地域住民団体の後押しのなか、つくられました。その後、1986年に「シルバー人材センター」が法制化されたのです。目的は高齢者が就業を通じて対価をいただき、そのなかで地域貢献や、健康、仲間づくりをしていくというものでした。特に名古屋市のシルバー人材センターは伝統的に福祉をベースとして存続してきた経緯があります。

森井 団体が立ち上げられた当時はど

んな仕事をされていたのですか。

若杉 スタート時は主に地域のご家庭からのニーズにお応えする仕事でした。襖の張り替えや植木手入れなどを行ったのです。また、ひとり暮らしの高齢者の方向けに住宅設備の簡易修繕にも取り組みました。

森井 その後、業務内容が拡大していったわけですね。

若杉 おかげさまで地元の民間企業さんにも声をかけていただくようになり、少しずつ成長して現在に至っています。

森井 所属されている人数や扱い金額を教えてくださいませんか。

若杉 ここで働いている人は「会員」と呼ばれています。会員数は約8,000人、契約金額は年間約29億円になっています。

森井 なるほど。想像以上に大きなスケールです。

センター独自のシステム 「会員」に学ぶ部分は大きい

若杉 私たちシルバー人材センターの特徴のひとつに、会員とセンターの間に雇用関係がないことが挙げられます。公益社団法人で会社ではないので、私や事務局と会員さんの関係は常にフラットなんですね。また、会員が得るのは賃金で



名古屋市シルバー人材センターの主な仕事の例。植木手入れ、ふすま障子張りなどの技能分野、除草、清掃、軽作業などの一般作業、介護保険、生活援助などのサービス分野、そして自転車駐車場、公的施設などの管理分野などフィールドは多岐にわたっている



はなく、配分金と呼ばれています。契約先からは配分金に8%の事務費を上乗せしたお金をちょうだいします。配分金は会員にお支払いし、事務費は当センターの運営に充てるという仕組みです。会員は自らの経験、知識を活かして主体的に仕事に取り組めるような環境のもとで就業しているのです。

森井 新しい働き方の提案ですね。

若杉 スローガンは「自主・自立、共働・共助」。月に概ね10日まで、週に20時間までを就業時間の上限としています。ですので、例えば1日8時間かかるビル内清掃を、1人で担当するのではなく、3人で3時間・3時間・2時間と分担して働くわけですね。高齢者なので、体力的にフルタイムで働くことが難しい場合がありますし、自分の時間や家族の介護など家庭との兼ね合いも考えなくてはなりません。そのような観点からみても良く考えられた仕組みです。

森井 なるほど。うまいシステムだと思います。私たちサイカパーキングでもたくさんの高齢者の方々に働いてもらっていますが、その多くは直接雇用です。収入が増えるともらえる年金が減額されたり、保険の手続きが複雑になったりするのですが、その点、シルバー人材センターの「会員」という仕組みならそうし

た問題はないのでしょうか。我々は民間でするので立場は違いますが、それでも参考にできる部分は少なくないと思います。

若杉 ありがとうございます。先述したとおり福祉ベースであることが当センターの特長です。会員が出向く先は一般の世帯が非常に多く、約20,000件に及んでいまして、子育て支援や家事援助、高齢者向けのちょっとした困りごとにお応えする軽サービスに取り組んでいます。それだけ地域に根差しているといっているでしょう。

森井 会員になるにあたって年齢制限はあるのですか。

若杉 上限はなしで原則60歳以上です。ちなみに男性の最高齢は96歳で植木の剪定をやられています。女性は94歳で筆耕（賞状の毛筆書きなど）をされています。

民間企業のコスト意識やスピード感などが刺激に

森井 貴センターと自転車駐車場管理業務の歴史について教えてください。

若杉 センターが設立された当時、名古屋市にも深刻な放置自転車問題がありました。1988年に撤去自転車の保管場所の管理を名古屋市から委託されたことが自転車に関連する最初の業務になります。その後、引き取り手のない自転車を修理して、カンボジアなど海外へ供与する仕事で2001年頃まで続きました。

森井 海外供与事業はたいへん意義の深い仕事ですね。それを約13年間続けられたのは大きな実績であると思います。

若杉 ありがとうございます。1994年に名古屋市の地下鉄桜通線が開通し、その際、駅前に有料駐輪場を整備する話が出て、その管理を依頼されました。

森井 そこから自転車駐車場管理の経験、ノウハウを積み重ねていったわけですね。

若杉 初めての仕事で当初は苦勞でしたが、業務が円滑に実行されないと地下鉄駅に付属した有料駐輪場の普及に支障が出る可能性もあり、会員は皆、志をもって自転車駐車場管理業務に臨んだと思います。それが評価されて、その後、管理対象となる自転車駐車場の数が拡大していきました。

森井 なるほど、それは素晴らしい。

若杉 しかし、2008年に行政の方針が民間も含めた競争性のある提案方式となり、当センターの契約件数がかなり減りました。その後、指定管理者の制度が導入され、機械設置とかメンテナンスも扱う必要が出たわけですが、しかし私たちはその分野はそれまでまったくノータッチだったわけです。どうしようか……と困っていた時に御社とのJVという新たな事業モデルの話があったのは本当にありがたかったです。

森井 こちらこそありがとうございます。私たちはこれまで約40年にわたり、全国の約1,500箇所できざまな自治体さんと組み、自動車・自転車駐車場管理の仕事をしていただき、進化する機械の扱い方や管理のノウハウを積み重ねてきました。ただ、名古屋の自転車管理については、我々の地元ではないため、人材の確保が極めて困難でした。それだけに、自転車駐車場管理の経験が豊富な人材を抱えている名古屋市のシルバー人材センターさんと組めるのは非常にありがたいことだと考えています。

若杉 ありがとうございます。

森井 先ほどからお話に出ているとおり、我々がこれまで自転車駐車場管理の仕事をお願いしていたのは直接雇用の「従業員」でしたが、貴センターの人はすべて「会員」なので、その違いにどう向き合うかも良い経験になると思います。今回の貴センターとのJVで得たノウハウが他の自治体との共働にも活用できるのでは、とも考えています。

若杉 我々から見てもこれは大きなチャ

ンスです。まず当センターにとっては、名古屋しか知らなかった会員や職員が、全国でサイカさんが培ったノウハウや最新の機械設備の情報に触れられる環境に置かれることで大きなメリットがあると思っています。また、民間企業ならではのコスト意識、利益追求の姿勢、物事を決めていくスピード感などは私たちがほとんど経験していなかったことだけに、非常に刺激を受けています。なにしろ、公益の法人というのは「収支相償」といって、黒字を出してはいけなるとされている団体ですからね。私は、今回の当センターと御社とのJVによって、各々だけでは達成できない、良い“化学変化”が起きるのではないかと期待しています。ひいては名古屋市にも、このビジネスモデルを実施して良かったと言ってもらえるのでは、とも期待しています。

森井 そうなるように全力を尽くすつもりです。

若杉 当センターはこれまで福祉をベースとして仕事を続けてきたと申しあげました。その経緯でいえば、自転車駐車場でも障がい者やひとり親家庭の料金は優遇する、あるいは乳幼児を連れた方には何らかの支援を行うといった仕組みが必

要だと考えておりました。その意味で御社が既に取り組みされておりました「おもしろいやりスペース」には大いに賛同しました。これなら、障がい者や乳幼児連れの親御さんなども含めて、何らかの不便を感じている方すべてに自転車を停めていただくことができます。うまいネーミングだと思いました。私たちはこれまで「身体障害者ブロック」などと描いたサインを立てていましたが、ちょっと視点を変えると、誰でも利用できるスペースになるんだなと感じました。

名古屋市の先進的な取り組み 敬老パス×マナカに期待

森井 共同事業開始以降、現場で働く会員さんからはどのような声があがっていますか。

若杉 楽しい、この仕事を続けたい、といった歓迎の声があると聞いています。私たちは基本的に駐輪場利用者とは「face to face」、つまり、必ず管理員が場内にいて、利用者のご不便に対応できる環境を保つことを重視してきましたが、御社から「常にface to faceでは管理



員の負担が大きい。濃淡をつけて管理員がいない時間帯もあっていいのではないのでしょうか」との提案をいただきました。それも含めて御社から非常に多くの貴重な情報や提案をいただいております。それを基に名古屋の利用者のニーズにアレンジし、自転車駐車場の運営や会員の研修に活かしています。

森井 当社からの提案が会員さんのモチベーションやスキルの向上に役立てば幸いです。

若杉 また、現金を扱う機会を減らしていることも会員の間では好評です。現金を扱うにはたいへん気を使います。徐々に機械化を導入していただいているのは非常にありがたいですね。現金を扱う時間が減った分を、face to faceの対応、場内清掃などにまわすこともできます。

森井 良い循環が始まりつつあるというわけですね。キャッシュレスといえば、名古屋市の交通系ICカード「マナカ」については現状どのように普及が進んでいるのでしょうか。

若杉 名古屋市さんでPRいただいていますし、自転車駐車場でもポスターや管理員の呼びかけなどで周知を図っています。昨年9月からは名古屋市独自の「敬老パス」にマナカ機能が付加されており、今後は高齢者が自転車駐車場でマ



今回の共同事業によって名古屋市シルバー人材センターと当社がウィンウィンの関係になり、良いビジネスモデルを示すことができれば理想的



昨年9月から運用が開始されたマナカ機能のついた敬老パス。同様のカードが全国に広がってほしいものだ

ナカを使用する回数も増えていくことに期待しています。

森井 敬老パスは何人くらいの方がお持ちなんですか。

若杉 敬老パスは65歳以上の方に交付されるもので、所得に応じ1,000円、3,000円、5,000円を支払っていただくと、1年間市バスや地下鉄に乗り放題になるカードです。現在、名古屋市には約56万人の65歳以上の方が暮らしていて、33万人以上が敬老パスを持っていると聞いています。

森井 なるほど。自宅から自転車で駅前の自転車駐車場に来て駐輪し、マナカ付き敬老パスで地下鉄やバスに乗って目的地へ行く。帰りも同様にパスで戻ってきて、最終的に駐輪料金の精算もカードで済ませる。パークアンドライドをいただけるわけですね。

若杉 そういうことになりますね。全国的にも敬老パスと交通系ICカードがくっついているというのはあまり例がないと聞いています。

森井 社内からの報告によると、名古屋市の自転車駐車場ではマナカ利用率が非常に高いところがあるそうですね。全国的に交通系ICカードは普及が進んでいますが、とはいえ東京の駐輪場でも高くても4割程度の利用率なのに対し、5～6割程度利用されている自転車駐車場もあると聞いています。名古屋市はその点でかなり進んでいるといえそうですね。

若杉 ありがとうございます。

森井 ただ、名古屋市さんはいいのですが、日本全域で見るとプリペイドカードの利用率は低いですよ。対して海外は進んでいます。例えば台湾のシェアサ

イクル「You Bike」で使える「悠遊カード」は、コンビニや自動車駐車場、自転車駐車場、銀行などでも使うことができます。昨年視察したオーストラリアのシドニー市、ブリスベン市でも同様の交通系プリペイドカードが普及していて、8割近くの人が愛用しているそうです。

若杉 それはすごいですね。

森井 はい。ただ、逆に言えば日本はまだ伸びしろがあるともいえます。名古屋市は進んでいますが、他の地域でもっと普及が進んでほしいですね。

自転車駐車場が進化して街のセーフティーゾーンに

若杉 カードによる利便性向上で利用者増が望めるのは良いのですが、半面、自転車駐車場での防犯にも注力する必要があります。その点についても御社から良い提案をいただきました。なかでも照明設備をLEDに変更したことはとても良かったですね。これまでは照度が不足がちで場所によっては、女性が一人で歩くのはやや抵抗がありそうな場所もありましたが、かなり明るくなりました。

森井 それは良かったです。自転車駐車場がただ駐輪するだけでなく、街の中のセーフティーゾーンの機能を兼ねるのも理想的ですね。

若杉 防犯については、従来どおり管理員の声かけによる啓発やツーロックの奨励を続けています。また、face to face

で接しているうちに多くの人と顔なじみになるので、そうやって醸成される独特の空気感が不審者を寄せ付けない効果も生んでいると思います。

森井 確かに最強の防犯対策は人と人の結びつきかもしれません。先ほど金銭の扱いは徐々に機械化していきましょう、といった話をしましたが、防犯については、人がいることこそ不審者にとっての脅威になるはずですから。そういえば、中学生から大学卒業まで通学のためずっと同じ駐輪場を利用していたという、あるお嬢さんがおまして、その方は東京大学に進んだのですが、卒論のテーマが駐輪場だったというんですね。私も読ませてもらったのですが、要するに管理員に中学から大学を卒業するまで毎日声をかけてもらったおかげで、駐輪場は自分にとって安心できる場所であったということなんです。ことほどさように駐輪場における管理員の役割は大きく、防犯の面でも良い仕事をされているのだと思います。

若杉 良い話ですね。当センターの会員もその点は期待できると思います。会員はあくまで地域への貢献という志で業務に臨んでいますし、なおかつ、駐輪場を利用するのは地元の人々で顔見知りも多いですね。

JVを通じて先進的な管理ノウハウを磨いてゆく

森井 続いて、自転車の防犯に関連したトピックスとして安全についてもおうかがいします。特に知りたいのが自転車保険です。名古屋市は今年4月1日に「名古屋市自転車の安全で適正な利用の促進に関する条例」で保険加入を義務としていますね。

若杉 はい、保険については今年10月1日に施行されます。また、65歳以上の高齢者には自転車利用時にヘルメットを

かぶるよと呼びかけています。自転車事故に遭った高齢者に頭部を損傷する割合が高かったことを受けてのことと聞いています。

森井 子どものヘルメット着用は首都圏でも定着していますが、高齢者への奨励は珍しいですね。先ほどの敬老パス同様、やはり名古屋は進んでいます。自転車保険に話を戻すと、もちろん万が一の事故の際の補償にはなるのですが、私が見逃せない保険の効果は、加入者の自転車利用に関する意識が上がることだと思っています。保険が適用されるのは、あくまで利用安全五則ののっとって自転車に乗っている時だけ。となると、やはり普段からルールを遵守するのが普通になってきますからね。

若杉 なるほど、確かにそうですね。

森井 では最後に、今後の貴センターの展望や期待することなどを教えていただけますか。

若杉 最大の使命は会員を少しでも増やしていくことです。ただ、近年は定年が65歳が中心になってきた関係で会員の平均年齢が上がっているんですね。現



理事長室にて約60分間にわたって対談。長年「福祉」の世界で汗を流してきた方だけに、シルバー人材センターの仕組みや今後の在り様などを分かりやすく説明して下さった

在は73歳です。そうした年齢にふさわしい就業ができるように環境を整えていく必要があると思います。また近年では、国が提唱した「シルバー派遣」という雇用による働き方の選択肢も登場しております。それにどう対応していくかも課題です。

森井 当社とのJVについてはどのような展望をお持ちでしょうか。

若杉 これから共同事業者として10年という長い期間をおつきあいさせていた

だくので、提案した内容をしっかり実行していくと共に、新しい仕事の取り組み方を吸収して、チャンスがあれば他の案件にも応用していければと思います。

森井 ありがとうございます。本日は貴センター独自の仕組みや自転車管理に臨む意識、当社との共働に対する反響、ご意見などさまざまなお話をうかがうことができました。こちらこそ今後10年間、名古屋でお世話になります、どうぞよろしくお願ひ致します。 **PP**

【パーキングプレス 発行人】 **森井 博** のプロフィール

- 一般社団法人 日本パーキングビジネス協会 理事長
- 一般社団法人 自転車駐車場工業会 会長
- 一般社団法人 日本シェアサイクル協会 専務理事
- 東京八重洲ライオンズクラブ 会員
- 六本木男性合唱団 団員
- サイカパーキング(株)、日本駐車場救急サービス(株)、モリスコーポレーション(株) 夫々代表取締役CEO

【略歴】 1938年(昭和13年) 宮崎県延岡市生れ78歳。
 1957年(昭和32年) 石川県立金沢泉ヶ丘高校卒
 1961年(昭和36年) 東京商船大学(現東京海洋大学)卒
 1961~1979年 石川島播磨重工業(現:IHI)
 1979~1991年 東芝
 1991年~ 現職

【趣味】 現在: ゴルフ・車・自転車・歌・仕事
 過去: 水泳・野球・陸上競技・テニス

【遍歴】 ゴルフ: 毎週1回ホームコースでラウンド、週1~2回練習場通い。
 車: 毎日通勤で運転。中古車3台を大切に乗り廻す。
 自転車: マツダレベル、ブリヂストンモールドトン、プロンプトン他数台保有するも年齢を考え余り乗らない。
 歌: 六本木男性合唱団でロクに楽譜も読めないのに毎週練習に励む。
 仕事: 健康のため平日は毎日9:00~17:00出勤、社員に迷惑をかけている。但し、土、日、祝日は絶対に出勤しない。
 水泳: 漁港で漁師の子供達と一緒に育ったため、小学校に入る前から泳ぎは得意。ちなみに小学校の名前は延岡市立港小学校。
 野球: 中学生までは本気でプロになるつもりであった。元西鉄ライオンズ 故・稲尾和久投手、完全試合投手 田中勉、元巨人 淡河弘捕手は友人。元巨人監督 原辰徳氏の父 故・貢氏も友人でボクサー犬を貰った仲。
 陸上競技: 高校時代 短距離、やり投げ、インターハイ2回出場。東京陸協元会長でオリンピック3回出場の大串氏とは友人。
 テニス: 元テニ杯選手 本井満氏のコーチでかなりの腕前(?)になるも、45歳時アキレス腱断裂でプレー終了。

過去の対談ゲストの方は、WEBでご紹介しています

パーキングプレス 対談 で検索

または <http://www.parkingpress.jp/taidan/> にアクセス

対談記事のバックナンバーもご覧いただけます。

